

王子を「🎵近代の大工業地♪」（堀船中校歌の一節）へと発展させた人物とは？

【王子は日本のリッチモンド】

明治時代に日本にやってきたイギリス人たちの間で、王子は、イギリスのリッチモンドだという評判が立っていたそうです。リッチモンドとは、イギリス ロンドンの西南に位置する行楽地で、英国の王立植物園があり、テムズ川も近くを流れる風光明媚な地域です。

王子には、飛鳥山があり江戸時代からの桜の名所でした。また周囲には音無川（石神井川）が流れる自然と水に恵まれた地域で、王子権現もあり、行楽地として親しまれてきました。明治当初の外国人は乗馬を楽しみながら、都心から王子までやってきたのです。

【桜の名所から大工業地へ】

王子は、幕末から明治にかけての時期に大きく変化しました。そのきっかけとなったのは、明治6（1873）年、千川上水のきれいな水と石神井川の流れを利用して洋紙を製造する「抄紙会社」（後の王子製紙）の設立です。この「抄紙会社」を設立したのが、2024年新紙幣1万円札に選ばれ、2021年NHK大河ドラマ「青天を衝（つ）け」の主人公の渋沢栄一です。

渋沢栄一といえば、第一国立銀行（現・みずほ銀行）、人造肥料（後の日産化学）、日本煉瓦、東洋製鉄（現・日本製鉄）、東京瓦斯（現東京ガス）、東京海上火災保険（現 東京海上日動）、帝国ホテル、東京証券取引所、清水建設、秩父セメント、キンピール、東洋紡績など約500社もの企業の設立に関わった、「日本資本主義の父」と呼ばれた偉大な人物です。この「抄紙会社」の跡地である王子駅前サンスクエア付近に「洋紙発祥の地」の石碑が建っているのは皆さんもご存じだと思います。渋沢栄一がここに製紙工場をつくったことにより、紙幣等をつくる大蔵省印刷局もできました。また、当時はパルプを製造する工程で、硫酸が必要でした。その硫酸も、渋沢栄一が関係した関東酸曹（後の日産化学）が製造していました。さらに王子製紙など製紙業界では、紙すきの際に乾かすのに、フェルト（動物の毛を圧縮してシート状にした繊維品）を使用することからフェルト工場（現 日本フェルト）も創業しました。このように、王子の町は渋沢栄一が創業した抄紙会社（王子製紙）を拠点とする紙の一大コンビナートが形成されていたのです。そう言えば堀船中の付近にも紙を使用する、東京書籍・リーブルテックもありますね。また飛鳥山には「紙の博物館」もあって、この土地の歴史を物語っています。

【飛鳥山には渋沢栄一の邸宅】

現在、飛鳥山の渋沢史料館・青淵文庫・晩香廬がある場所一帯には明治22年に渋沢栄一の広大な邸宅（別邸）が建てられました。第一国立銀行（現・みずほ銀行）と東京証券取引所のある日本橋兜町には洋館の本邸を建てています。どうして飛鳥山に邸宅（別邸）を建てたのでしょうか。

日本橋兜町も飛鳥山も自分の事業に関係のある場所を選んで住んだことは間違いありません。加えて、渋沢栄一は今の埼玉県深谷市の出身です。飛鳥山は日本橋兜町から深谷への道すがらに当たる位置なのです。日本鉄道（後の高崎線）王子駅が開業すると王子から深谷までは直結となりました。故郷の深谷には日本煉瓦を創業し、ここのレンガは東北線で運ばれ、東京駅や旧法務省建設に使われました。晩年にいたるまで、渋沢栄一は王子駅から汽車に乗り込み、故郷である深谷との往復をしていました。

王子は渋沢栄一にとって東京のなかでも故郷に通ずる心安らく場所だったのでしょう。日本のリッチモンドから、堀船中の校歌に謳われる「🎵近代の大工業地♪」へと発展させた人物が、「日本資本主義の父」渋沢栄一なのです。

そう考えると堀船中の校歌の歴史的価値を改めて感じるすることができます。